



緩んだかと思ったらまた縮みあがるような寒さ。2月の空気に合わせ身体も心も収縮を繰り返す毎日。それはまるで、また一つの大きな「呼吸」のようにも思えます。季節の呼吸に育まれた木々の枝先には新芽が光り、新しい花が開く時をじっと待っています。春を待つ子どもたちもまた同じように。

新年初日の獅子舞演舞鑑賞



三学期の始業日の朝に全校の児童、生徒が近隣の公園に集まりました。学園におめでたい「獅子舞」がやって来たのです！

事の始まりは、聖夜劇でした。卒業生の保護者で、今も聖夜劇メンバーとして毎年かかわってくださっているあるお父さんが地元で獅子舞の保存会に所属し、新年には町会を巡って獅子舞演舞の笛担当として活躍しているらしい、との話が教員たちの耳に届きました。

「もしかして、学園に出張公演(?)できませんか?」とお尋ねしたところ、「願ってもない。喜んで。」とのお返事を頂きました。そこで教員会議で検討し、今回の獅子舞招聘に繋がりました。

1月11日。霧が丘、十日市場両校舎では、それぞれのクラスが新学期の挨拶を行ったのちに、コートを着込んで近隣の菅場公園に向けて出発しました。

「三階」と呼ばれる、一番広い敷地の草地部分にはすでに二畳ほどのブルーシートが敷かれ、ねじり鉢巻きに祭り半纏といういでたちの三人が、一人は笛、一人は小太鼓、そして一人が獅子頭を手を持ち、全校の子どもたちが集まるのをここにこして待っていました。朝日が眩しいくらいの晴天でした。

全クラスが揃い、その周りには初めての獅子舞来校を知って、見に来てくださった保護者や先生方が立っていました。

そして、衆人環視の中、一人が獅子頭の中に自身の上半身を滑り込ませると、獅子舞演舞の始まりです。軽快な太鼓のリズム、楽しげな笛の調べに合わせて、獅子がたてがみをふりふり、足踏みをしながら御座の上で舞い躍ります。かぶりつきに座る低学年の子どもたちの目は、獅子の動きに釘付けです。獅子がカチカチと歯噛みしながら自分のほうに近づくと、そっと体を後ろに引く子はいましたが、泣く子はいませんでした。

なんと、お獅子はみかんが大好きだそうで、1年生がみかんを御座に転がすと、猫がじゃれるようにみかんで遊んでから上手に口の中にパクリと入れて、嬉しそうに首を揺すりまです。足で耳の後ろを掻く仕草が巧みで、思わず引き込まれてしまいました。



ひと舞い終わるとお囃子の曲が変わり、獅子は周囲を歩き回りながら子どもたち一人ひとりの頭の上でパクリと「厄災」を食べてくれました。もうすぐ劇本番を控えた8年生は、「これで、成功間違いなし」と安心した表情になりました。こうして、学園の歴史に新たなページを刻んだ新年行事、獅子舞が終わり、皆が拍手喝采した後は・・・、全校手つなぎ鬼大会です！

司会の神田昌実先生が、「さあ、これから、手つなぎ鬼を全員でしますよ!」と伝えると、「えええ?」と驚きの声が上がりました。「いやだあ。」という、否定的な反応も聞かれたのですが・・・。いざ始めてみるとさっきのブーイングは何だったのかと思うほど、1年生から9年生までが生き生きとグラウンドを走りまわり、鬼ごっこを楽しみました。9年生が最初に鬼になりました。足の速い7、8年生に目を付けて追いかける生徒あり、反対に1、2年生を狙って、両手に小さな子たちの手を取り、楽し気に走る生徒あり、徐々に他の学年の子どもも鬼と手をつなぎ、ものの数分間で手つなぎ鬼は終了しました。なんだかんだ言っても、まだ遊び心いっぱいの高学年のお兄さん・お姉さんに捕まえてもらえて嬉しい低学年の子どもたち。広いグラウンドを思いっきり走った子どもたちの表情は明るく、新年らしい晴れやかさでいっぱいでした。

今回が初めての試みでしたが、普段は二校舎に分かれて学んでいる子どもたち全員が顔を合わせて集うことができ、良い一年の始まりになったと思います。これからも是非、新年に獅子舞をお招きしたいと思います。

(3年生担任 長井麻美)

横浜シュタイナー学園で過ごす9年間の中でも、とりわけ大きな学びのひとつに、8年生で取り組む「劇」があります。(通称「8年生劇」と呼ばれています。)今年度は、年明けの1月13日、14日の2日間、みどりアートパークにて上演しました。8年生担任の神田昌実先生からの報告です。

8年生劇「夏の夜の夢」を終えて



「ああ、よく眠った。」そう思いながら目覚めた2023年1月15日、日曜日の朝だった。

「明日は目覚ましをかけずに自然に目が覚めるまで寝ていよう。」と決めて昨晩は床に就いた。どうやら布団に入った途端に眠ってしまったらしい。朝までぐっすりだった。

「そうか、8年生劇が終わったんだ。」本当に昨日とおとといは、劇中の登場人物たちの台詞さながら「夢のような」2日間だった。その余韻に浸りながら8年生劇について担任として心に浮かんでくることを書いてみよう。

年間計画では11月中旬に8年生劇の上演は予定されていた。しかし、コロナ禍の中での劇場使用などに関する規制が少し緩んだこともあり、文化行事の多い11月の公会堂は予約ができる本番の半年前(5月)の時点であつという間にうまり、くじ引きもことごとく外れ、11月の上演は諦めざるを得なくなった。12月はアドヴェントや学期祭や聖夜劇などの学内行事があり8年生劇を入れるには忙しすぎると判断し、会場取りは1月を目標に再開された。私の希望する日時を伝え、保護者が一斉に手分けしていろいろな会場のくじ引きに行ってくれたり、インターネットでの予約システムに申し込んだりと奔走してくれた。その結果、距離的にも、設備的にもこれ以上ないというみどりアートパークが取れたことに私は、「私たちは祝福されている。」と思った。

私は上演当日に配布されたプログラムの担任挨拶に以下のように書いた。

本日は横浜シュタイナー学園11期生の8年生劇「夏の夜の夢」にお越しくださり誠にありがとうございます。

11期生たちの大半は担任の性格とは裏腹に目立つことはあまりしたくないというタイプです。

授業中の問いかけにも挙手をすることはまれで、気の短い担任は片っ端からどんどん指名していくという日常です。さあ、こういう彼らに劇を演じさせることができるのだろうか。

それを可能にする演目はあるのだろうか。

クラスの人数は男子7人、女子9人の16人。

全員を活かす題材は何だろう？

不思議なことにそれは、

1年も早い7年生の秋に私のもとに降りて来ました。それがシェイクスピアの名喜劇「夏の夜の夢」だったのです。

横浜シュタイナー学園では初めて演じられる演目です。

「シェイクスピアはやりたくない!」という声もありました。

「それがね、これはすっごく面白いんだよ。」

「しかもすっごく難しい劇でもあるんだなあ。」

「私にはみんなが拍手喝采を浴びている姿がもう見えるよ。」

「先生、それは幻影です。」

「そして観客の大歓声も聞こえるよ。」

「先生、それは幻聴です。」

こんなやり取りをしながらも、

言い出したら聞かない担任の提案を

生徒たちは諦めて受け入れ、

自分たちがまだ経験していない「熱い恋心」を全力で表現しようと練習しました。

劇はお客様に観ていただいて完成するものです。

ですから最後の仕上げは皆様に任せします。

私の幻影と幻聴を

私の自慢の16人が現実としますように。

これは私の正直な気持ちだ。そしてさらに正直に言うと現実になることを確信していた。

「劇が好きな子も苦手だと感じている子も、各々が自分の最大の力を出しきって取り組み、16人全員が輝き、全員がやり切った満足感と共に幕を閉じるような芝居にしたい。」そう強く願っていた。8年生劇の一番の目的はそこにある。

12年生まであるシュタイナー学校は8年生で担任期間を終え、小さい頃から見続けていた担任から卒業する。そして高等部へと自分の「個」を携えて進んでいく。その区切りの集大成が8年生劇だ。

自分の役を演じるためには台詞を覚え自分で努力しなければいけない。しかし、相手役がいるわけなので相手との間の取り方や動き方などはグループでの練習になる。仲間や教師からのアドバイスに耳を傾け、自分の考えも伝えながら一番良いものを目指す。自分の言い分をどこまで通すことが最善かということも考えるようになる。



最初は恥ずかしさが勝り、演技の質を重視することができない子も多い。しかし、稽古が進むうちにそれでは良いものは作れないことに気づき始める。そして観客に笑ってもらったり、感動してもらったりできる劇に仕上げたいと思うようになる。そうなるのはだいたい本番の直前だ。

しかしこの時期になると、一緒に進んできたクラスメイトの絆は非常に強くなっている。友達のために役に立つことなら率先して行いたいと思えるようになる。舞台上で何かハプニングが起これば、みんなで乗り切れるようになる。そうならなければ本当に良い劇はできない。

1日目はホール開場 10 分前まで舞台上で心配な部分の練習をしていた 8 年生だったが、幕が開くとお客さんの温かい視線に守られていることに気づき、安心して今まで見せたこともないくらいの力を出し始めた。私は内心、「あなたたち、劇が苦手だなんて嘘でしょ。今まで私を騙してたでしょ。そんなアドリブをどうして本番で入れられるの?」といい意味で裏切られたことが嬉しかった。



本番の数日前、私は生徒たちに「私たちは観客の皆さんにどういう劇を見せたい? どう感じてほしい?」と質問した。色々な意見が出たが「もう一度観たい、と思ってもらえるような劇にしたい。」との意見でまとまった。そのことを意識してはいなかったと思うが、彼らの演技は確実に観客の心をつかんだと思った。帰りがけに高揚した表情でその感動を伝えてくれた方々にお礼を言いながら私は 16 人の一人ひとりごとでも誇らしかった。



2 日目の朝も、1 日目同様ホワイエに生徒・教員・保護者・照明担当者全員が輪になって集まり、各自が自分の役割を最善のものになるように務めようと心をつなげる集まりを行った。その時私は生徒たちに「昨日の演技を見たからもう

大丈夫。今日はどうぞ好きにやってください。」と言い、皆が笑った。私の注文などより彼らが好きなように気持ちよく楽しく演じれば劇は大成功になるだろうと信じられたからだ。

劇の練習に入ったばかりの時に決めたクラスのスローガンは「緊張に負けるな、楽しむのが一番、臨機応変」だった。この全部を彼らは実現したと思う。そしてお客さんに感じてほしかったことも実現しただろう。もちろん私の幻影や幻聴も現実になった。

観客を上質なユーモアで笑わせるのは泣かせるよりも難しいと私は思う。8 年生たちは観客が笑った後の台詞を少し間をおいて言えるようになっていた。心が成長していなければできない技だ。野ばら 27 号は「間」がテーマだったが、人生を生きる上で「間」を読むことは非常に重要だ。劇作りはその大切な「間」を教えてくれる最良の教材だと思った。



最後に気づいたこととして触れておきたい。それはシェイクスピアはやはりすごいということだ。シェイクスピア作品は本で読んだのではあまり面白くなかったり、理解が難しかったりすることがあるが、演じてみるとその可笑しさや悲しさや深い感動を実感できる。何百年も世界中で上演され続けていることが納得できた。

そうそう、これも忘れずに伝えたい。今回先輩の 9 年生たちが全員で 2 日目も、もう 1 回劇を観に来てくれたことが私にはすごく嬉しかった。去年の自分たちの経験から本番前にはたくさんの応援の言葉を 8 年生にくれた。そして本番には 8 年生の健闘を本当に喜んで大きな声援を前の方の座席から送ってくれた。

9 年生諸君、どうもありがとう!

こんな素敵な思春期の若者たちが育つこの教育はやはりすごい。しかし、大人はいつまでも感動の余韻に浸ってしまうが、若者たちはすっきりと、きっぱりと、潔く、次に向かって進んでいくのだ。あれだけ頑張った劇だが、それを引きずることはない。家庭でも学校でも彼らが急に素晴らしい大人になるなんてことを期待してはいけない。「何よ、相変わらずダラダラして! 屁理屈は言うし、肝心な事は話さないし!」ということはまだ続く。彼らが順調に成長している証拠だ。しかし劇作りの体験は彼らの中に種を蒔き、そこから小さな芽が芽生えたことだろう。その芽が育ち花を咲かせる日がいつなのかを私は知らない。しかしその日は必ず来ると私は信じていることができる。その確信を胸に、「何やってんだあ〜!」と叱り飛ばす毎日がまた始まるのが楽しみだ。

(8 年生担任 神田昌実)

高等部のない横浜シュタイナー学園では、中学生3年生にあたる9年生が最終学年となります。この最終学年の1年間は、この学園での学びの集大成ともなることがたくさんあります。そのような中で、今年度の9年生は、英語の授業で歴史に残るスピーチ・詩の暗唱発表をしました。英語専科の野村直子先生からの報告です。

9年生 英語暗唱発表



1月24日(火)、9年生は「歴史に残るスピーチ・詩」の英語暗唱発表をしました。

横浜シュタイナー学園での最終学年に、心の栄養になるような質の良い英語を身につけられるように、という願いから、長い時間を経ても消えることなく記憶されているスピーチ・詩に向き合うことにしました。9月から取り組みを開始しました。

授業では、3つの題材に臨みました： 映画監督・俳優チャールズ・チャップリンの映画「独裁者」(1940年制作)の最後の演説、マーティン・ルーサー・キング牧師の演説(1963年8月28日)、詩人アマダ・ゴーマンのバイデン大統領就任式での詩の朗読(2021年1月20日)。臨んだ題材はどれも大変長いものだったので、暗唱練習には、特に届けたい内容を多く含む箇所を選びました。「折角覚えるのだったら、一部でなく、丸ごと全部覚えられるものにしたい」という考えを伝えてきた生徒もおり、米国第16代大統領エイブラハム・リンカーンの演説(1863年11月19日)も、追加しました。4つの題材に関わって、暗唱の他に体験したのは、共通した語句表現を見つけたこと、時代や場所が異なっても変わらない、人々の普遍的な思い・願いを感受したこと、演説の中で引用されている歌(黒人霊歌も)を歌ったこと、原稿に引用されている聖書の言葉から彼らの文化の背景の一部に触れたことなどでした。

それぞれの題材についての歴史的背景、どのような聴衆に届けられたのかななどの話を9年生たちとやりとりをしながら進めました。それらの話を興味深そうに受けとめる姿勢から、弾みがついていく感触を得ていました。ところが、内容理解・音読練習の後に、いざ暗唱を課すようになってからは、「今日は疲れていて無理」、「やる気が出ない」のような声が聞かれることもありました。そんな時は、遊びの要素を多く含む活動に切り替えたり、「14・15歳の今、身につけること・吸収することは、大人になってからのそれとは全然違う」、「そんな今、美しく力強い英語の言

葉を記憶に刻むことには意義がある」と私自身が身をもって感じていることを真剣に伝えたりしました。9年生たちは、自分たちが「今」持っている感受の力や吸収・体得する力については、感覚的につかんでいる様子で、暗唱する意味は「わかる」と言いつつ、「でも…」という言葉の続くことが重なり、取り組みを進めるうえでの妨げを感じずにはられない、苦悩の日々もありました。しかし、流石9年生、それぞれがその時々目標を決め、集中して練習するときと、言葉遊びやジェスチャー、クロスワードなどを思い切り楽しむときのめりはりをつけながら、届けるべき言葉の理解を深め、少しずつ暗唱できる文の数を増やしていきました。

11月、(高等部1年生としての)パソコンのエポック終了後に、実際のスピーチの映像を視聴しました。9年生たちは、画面を見つめながら、「意外と動きが少ない」、「こんなに(聴衆が)いたんだ」、「(言葉を届ける人が)きれい」、「生き生きしている」、「迫力がある」のようなつぶやきも発していました。映像を観た後、声の出し方やジェスチャーなどの新たな変化も少し加わりました。ただ、ふだんから一緒にいる仲間の前での発表には、なかなか気合が入らなったり、本気を出すのをためらったりしている様子が見られました。12月中の授業には英語科の他学年担当の先生方に見学にも恵まれ、ふだんと違う緊張感の中で、感想や意見、助言をいただきました。一方、この頃、9年生保護者・7年生・8年生をお迎えして暗唱発表することに決定しました。また、2学期の学期祭でも、暗唱している一部を発表することになりました。更に、発表順は実際のスピーチ・詩の時代順とすることも伝えました。12月16日、学期祭でのステージ発表では、一人ひとりの立ち姿、表情や声から、緊張感や本気度の高さが真直ぐに伝わってきました。教室を出て、多くの皆さまに聞いていただく意味を深く感じました。



1月に入り、「発表本番では演台がほしい」という意見が述べられました。その理由は、「学期祭のステージでは聴衆の前に身一つで立ち、何か心許なかった」、「映像を観たときにも、演台があり、そこに手を添えていた」などでしたが、「いざというときのために原稿が置ける」というものもありました。そこで、「言葉を忘れてしまった場合は、近くから小さな声できっかけを出すのはどうか」と提案をしました。しかし、「それはかっこ悪いからいやだ」という即答が来ました。そこで、更なる提案として、「『格好悪い』と言えば、原稿に頼るのも同様だと思う。当日は、演台を前に、その時その場の自分のもつすべてを、深く何の力も借りずに出し切るのではどうか」とし、受け入れられました。



発表当日、身につけてきたものを一人ひとりが発揮したと思います。「発表が届けたい思い」と「当時の弁士や朗読者、時代背景など」について、短く日本語で語った内容も、よく考えられていました。学期祭のときよりも格段に余裕と自信が感じられました。良い発表になったのは、温かい雰囲気を受け止めていただいていた保護者の皆さま、7・8年生、先生方の存在も、やはり大きかったと思います。

暗唱発表後、授業でやっている「目に見えないものを表すジェスチャー」も少しご覧いただきました。例えば「机」、「壁」のように見かけで表せる語句ではなく、「平和」「未来」などのような形のない言葉を身振りで表すというものです。暗唱した題材には、そのような言葉がいくつも出てきました。授業では、ジェスチャーの他の活動として、それらの語を連想する状況を違う言葉で表現する、それらの語を題にして短い詩を書くなどして、一つひとつの言葉を捉えていく試みもしてきました。さて、発表後のジェスチャーもいつものように進めました。お題は、「greed(欲)」、「dawn(夜明け)」、「freedom(自由)」など。一人ひとりが言葉の書かれた一片の紙を引き、準備のできた人から動きました。9年生の上手な動作を見ながら、思いつく言葉が次々に発せられたり、会場全体が笑いに包まれたりして、正解も円

滑に出て、楽しい空間・時間になりました。最後の正解が出たところで、当日欠席した一名分の一片が袋の中に残留していることに気づきました。「あと一枚残っているけれど、誰かもう一回やりませんか」と尋ねると、ふだんの授業ならば、誰かが「やる!」と、さっと出てくるのですが、この日は9年生たちから私が指名されるという不意打ちが発生しました。残っていたお題は「harmony(調和)」。見えないものを身振りで表すのは甚だ難しいことを知りました。貴重な体験を与えていただき、感謝する機会になりました。

暗唱発表後、「もう練習しなくていい!」という言葉が聞かれましたが、その後の授業の中で、暗唱してきた語句がふと使われている場面に接することが幾度となくあり、密かに心を打たれております。自らの暗唱だけでなく、級友たちの暗唱を聞きながらも言葉の意味や届けられた思いを確かに受け止めてきたのでしょうか。難しい課題でしたが、9年生各々が最善を尽くして臨む中、無意識のうちに裏打ちしてきたものがきつとあると思います。私は、若い頃口ずさんでいた歌の歌詞の意味について、大人になって不意に新たな理解をしたり、他の事象との結び付きを感じたりすることがあります。9年生たちも、暗唱した言葉や内容を忘れた頃になぜか俄かに思い出し、「あれはこういうことだったのか」と息を呑むような気つきがあるかも知れません。いつの日か、そんな機会が訪れることがあれば幸いです。

(英語専科教員 野村直子)

【受付中】横浜シュタイナー学園で学ぶ

「シュタイナー学校の英語～1年生から9年生まで～」

第2期 2023-2024

“Education is not the filling of a pail, but the lighting of a fire.”

-William Butler Yeats

子どもたちがどのように英語を学んでいくのか、

成長に合わせて順を追って体験しながら学ぶ連続講座の第2期です。

日程：全10回 午前(10:00～12:00) 午後(14:00～16:00)

2023年

4月29日(土) 第1・2回：1年生「模倣1」、2年生「模倣2」

7月29日(土) 第3・4回：3年生「文字の学び」、4年生「読みとリズム」

10月14日(土) 第5・6回：5年生「記憶の強化」、6年生「物語を読む」

12月23日(土) 第7・8回：7年生「文法の発見」、8年生「文を作る」

2024年

1月27日(土) 第9・10回：9年生「劇」、まとめ

★その他、詳細は学園サイトをご覧ください。

インフォメーション

～詳細やお申込方法については学園サイトをご覧ください～

修了の会の一般公開

日にち：3月18日（土）

時間：10:30 受付開始 11:20 開演（終演予定 12:55）

会場：緑公会堂（緑区総合庁舎内）

* 完全予約制となります。

学園サイトよりお申し込みください。

申し込み締め切り：3月15日（水）

ふるさと納税（よこはま夢ファンド）を通じて横浜シュタイナー学園をご支援いただきありがとうございました。沢山のお気持ちを寄せていただけました事、この場を借りてお礼申し上げます。

引き続き、ご支援の程どうぞよろしくお願いいたします。

https://yokohama-steiner.jp/unei/gakko_dukuri/
（4つのサポート）

横浜シュタイナー学園 寄付助成金グループ

NPO 会員募集

横浜シュタイナー学園の活動趣旨に賛同し、活動への参加、支援を希望される方は、どなたでも NPO の会員になれます。会員は総会への参加の他、紀要冊子「野ばら」（年1回発行）とニュースレターをお送りします。正会員・賛助会員ともに、年間を通じて学園主催の講座に参加ができる、パスポート（4000円）をご購入いただけます。ご入会は学園事務局にご連絡ください。

～事務局より～

ご支援ありがとうございます。

（順不同・敬称略）

< よこはま夢ファンドを通してのご支援 >

千原遠見彦、千原由美子、西田洋平、
尾上浩一、千代康、保坂純子、
柳本修吾、吉野茂紀、島田頌、
岡田将子、金子二郎、秋山朋三、小林淳志

< 一般のご寄付 >

二期生保護者一同、上星川獅子保存会、
おひさまカフェ、星の金貨

学園にお気持ちを寄せてくださり、心より感謝申し上げます。

☆ 星の金貨より ☆

涼風書林やイザラ書房の本、アトリエルピナスの季節のポストカード、香りの優しいヴェレダ、美しいシルクやコットンの布、可愛いフェルトのお人形、綺麗な石、手触りの良い木工品など揃えております。

子どもたちが使用しているクレヨンや色鉛筆、エポックノートもございます。どうぞお立ち寄りください。

お問い合わせ ☆ 星の金貨

kinka.hoshino7@gmail.com



YSG メールマガジン配信中

公開講座やイベント開催など、学園のさまざまなトピックをメールでお知らせします。

ご希望の方は学園 WEB サイトよりご登録ください。

お問合せ、お申込み先

横浜シュタイナー学園事務局

Tel: 045-922-3107

【会費・ご寄付等お振込先】

郵便振替： 00260-0-130702

加入者名：特定非営利活動法人横浜シュタイナー学園

ゆうちょ銀行：店番 029 支店名 029 店（せりり店）当座 0130702



横浜シュタイナー学園

～Newsletter 第157号～

2023年2月20日発行

編集： 広報の会

発行： NPO 法人 横浜シュタイナー学園

<https://yokohama-steiner.jp>

〒226-0016 横浜市緑区霧が丘3丁目1-20

TEL 045-922-3107

※ 掲載内容の無断転載をお断りします